

「私が研究する理由(2) ～研究の視点の必要性～」

私は現在中学校教員です。修士取得後、研究者の道ではなく、実践者としての道を選択したのですが、今思えば、この経験が“教育”の研究を進める上で大変重要なことだったのではないかと感じています。技術・家庭科の教員としてスタートし、特別活動の実践を重ねた後の「魅力ある学校づくり」調査研究(国研)、そして異年齢交流を通じた「キャリア教育」の試みを行っています。

これらの現場の教育活動の重要性を感じるほどに、実践は研究と協働しなければならないことを痛感します。

学校現場(と言っても愛知県内を転々と異動した経験と各種学会・研究会での交流を通じた経験による感覚ですが…)の実践は、目の前にいる子どもの健やかな成長を目指して取り組まれています。一方で、昨今の教育現場での働き方改革の影響から先生方の仕事量の軽減が随分と進んではきているものの、こうした実践・教育活動を担当する先生の負担はそれなりにあります。毎年同じ先生が担当していれば例年と比較しつつ新しい視野で実践を改善することや時代や現在の子どものに適した活動を企画することもできると思いますが、なかなかそれは難しく、悪い言い方をすれば「例年通り」もしくは若干の修正が入ったもの、となる傾向が強いです。

最も気がかりなのは、実践した教育活動に対しての評価の部分です。生徒には活動後の振り返りを実施して生徒自身の自己(他者)評価から次の課題を見出すように学習を進めていますが、この実践そのものが果たして効果的な(ねらいに対して)活動であったかどうかを客観的に捉える機会が非常に少ないと感じています。

各実践後には先生方への反省等アンケートを実施して活動を評価し、次年度への提言として整理していますが、その改善についてはあくまで先生方の感覚や経験に基づいたものとなっています。

この評価方法自体は決して悪いものではありませんが、どうしても担当者や発言力のある先生の影響を受けやすく、実践を客観的にもしくは実践の未だ気づいていない価値を捉えることが困難になります。また、先生方は自分たちの仕事量も考慮しながら活動を選択するため、活動量が増えることを避ける(費用対効果としては当然なのですが)傾向があります。例えば生徒の主体性を生かした生徒会活動など、中長期的に見ると減少されるが短期的、一時的には先生方の負担が増える(主体性を軌道に乗せるまでの指導にかかる時間や手間)、こうした活動に対して見通しを持つことは、類似した経験がなければ難しく、なかなか受け容れられにくい傾向があります。(特別活動領域はこうした大変さがあります…)

学校の先生方の中に研究の視点をもって実践の価値や客観的な評価ができる方がいれば、主観的・体験的な評価だけでなく、より効果的な教育活動の PDCA サイクルが生まれ、予測困難かつ変化の激しい現代社会に適した新たな実践が受け容れられやすくなると思います。

しかし、実践者かつ研究者…は本当に難しい。だからこそ、研究者が学校現場と協働する必要があるのです。

〔「研究する」 2023年5月〕

教育は子どもの成長を扱う分野のため、目に見えにくく、物理学などのように白黒はっきりしているものではありません。だからこそ様々なファクターが複雑に絡み合っている子どもの成長を研究の視点が、実践の現場により近い場所でこそ必要なのです。

この実践は本当に実施する価値があるものなのか、もっと効果的に行う方法はないのか、実践に対する子どもの変容は適切に捉えることができているのか…こうした問いが学校現場には常に生まれています。試行錯誤しながらその解決に向かうことは重要ですが、できることなら一緒に考えていただける研究者がいたら…もっと教育現場は充実したものになるでしょう。

私が目指しているのは、教育への願いがより適切に実現するための研究です。研究のために研究を重ねるのではなく、主観的に教育を語るのではない、研究者と実践者が手を取り合って教育活動を進めていきたいと考えています。

研究者の皆さん、教育現場へ是非いらしてください。実践者の皆さん、研究者と仲良くなりましょう。目指す方向は同じはずです。

(愛知県みよし市立三好中学校 村瀬悟)